

感染症・予防接種レター (第86号)

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会

委員長 岡田 賢司
津川 毅

副委員長 多屋 馨子
並木由美江

久保田恵巳
東 健一

城 青衣
三沢あき子

菅原 美絵
渡邊 久美

保育現場から新型コロナウイルス感染症対応の現状報告

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい第4波が懸念される(2021年4月20日現在)。最前線で活躍される医療従事者の皆様に感謝を申し上げます。

社会全体が感染症対策と向き合って1年以上が過ぎ、保育の現場でも子どもたちの生活上さまざまな変更や工夫をして過ごしている。保育施設の看護師から聞き取った取り組みや工夫などをもとに、現状を報告する。

II. 保育施設における感染症対策の取り組み

全国的な緊急事態宣言が昨年春に発出され、保育施設も対応に苦慮しながら過ごしてきた。保育施設は生後57日からの就学前の子どもたちが過ごす生活の場である。遊び、食事など一日の生活様式から、運動会や卒園式といった行事に至るまで変更を余儀なくされた。

保育施設の感染症対策は、「保育所における感染症対策ガイドライン」¹⁾により行われている。当初、情報が少ない中で、保育施設で働く看護職などは厚生労働省のホームページなどから情報を集め対応してきた。具体的な対応としては、日本小児感染症学会から「保育園における新型コロナウイルス感染症に関する手引き」²⁾が出された。また全国保育園保健師看護師連絡会から「保育現場のための新型コロナウイルス感染症ガイドブック第1版」、続いて同「第2版」³⁾が出され、現場での活用が進んできている。新型コロナウイルス感染症の基礎知識と感染拡大の予防の原則、保育施設での実際の対応についてまとめている。そうした知識や経験をとおして、最近では新型コロナウイルス感染症の発症者が出た場合や濃厚接触者の対応策な

ども、それぞれ保健所や自治体との連携が以前よりは進んできている。

感染予防対策として「3密を防ぐ」、「換気」、「手洗い」、「マスク着用」が基本である。しかし、保育施設の子どもたちは、効果的な感染予防をほとんど自分では行えない。特に乳児や低年齢の子どもたちは、抱っこや膝に座るなど保育者と密接なスキンシップが大事な時期である。それをせずに子どもたちとかかわるのは大変難しい。乳児は口元を触るし、指しゃぶりもする。よだれや鼻水も出る。人と人との身体的距離をとることは保育施設では難しいし、子ども同士で距離を保つこともできない現状がある。

III. マスクの着用と手洗い

子ども同士や子どもからの飛沫をどのように予防したらよいかという問題に対して、マスクの着用がウイルスを拡散させないために最適であると言われている。ただし、子どものマスクの着用について、WHOは5歳以下の子どもにマスクを義務付けるべきではないとし、咳や鼻水があったら無理のない範囲で着用としている。厚生労働省は、WHOのガイダンスを参考に、2歳以下の着用は窒息や熱中症のリスクがあることから推奨しないこと、また、2歳以上であっても周囲の大人が子どもの体調に十分に注意を払ったうえで着用することとしている。保育施設でどのように対応するか初めは悩んでいたという声は聞かれるが、現状は2歳未満や自分でマスクを外すことができない子どもは窒息の危険があるので使用しないで保育している。3歳以上のクラスはマスクの正しい付け方やなぜマスクをするのかを伝え、マスクを嫌がる子どもは外し、無理して着用をさせていない。ただ、日々の生活の中で子どもたちもマスクの着用に慣れてきているよ

うで、食事のときはマスクをカバンに入れて、交換することもできるようになってきている施設もある。小学校ではマスクの着用が必要なので、年長クラスはマスクの扱いを指導して着用に取り組んでいる保育施設もある。

保育者のマスクの着用にあたっては、人の表情が見えにくいので子どもの情緒や言葉の発達に悪影響はないのかと心配する声があがったが、今は感染予防を優先し保育者はマスクをして保育をしている。子どもがマスクを着用していて息苦しくないか、大人が様子を見ながら、また、鼻水や咳の症状があるときなどは個別に対応し、子どもたちの発達段階に合わせた対応が望まれる。大人同士がマスクを外した状態で話さないように心がけ、特に昼食や休憩時間を工夫してとるなどで対応している。

子どもたちへの手洗いや咳エチケットについての健康教育が必要になる。

乳児はこまめな手洗いは難しいが、食事前など大人と一緒に手洗いをする事で習慣化されていく。幼児は発達段階に合わせて手洗いの必要性や手技を説明してもらい、自分できれいに手洗いできるようにしていくことが大切である。毎日繰り返していくことで子どもたちは自然に習得し、新型コロナウイルス感染症の流行以前より上手に手洗いができるようになってきている。

IV. 保育の工夫

- 感染予防のために遊びや活動を少人数できるように心がけ、天気の良い日は戸外遊びを中心に活動をしている。
- 密閉・密集空間での音楽（歌やピアノ等）や体育活動は避ける。換気を定期的に行い、部屋で大きな声は出さないなど心がけている。
- おもちゃの消毒、よく触る箇所の消毒やトイレなどの清掃や消毒も、以前より多くするようにしている。
- 食の場面では、できるだけ間を開けて対面にならないように座ることや、子どもたちには大きな声で話をしないように伝えている。
- 午睡では、間をあけて布団を敷くことや、頭と足を交互にして寝るような工夫もされている。
- なるべく合同保育の時間を短くする工夫もされている。

- 子どもの送迎時の工夫として、子どもを受け入れる場所を玄関のみとしている施設や保育室の入り口にするなどの施設もある。

V. 保育現場の職員や保護者への対応

子どもを感染症から守ることは、保護者の協力なしにはできない。

- 送迎する際の保護者の体調管理はもちろん、マスクや手洗いなどの基本的な予防策は必須として対応している。
- 保護者とのコミュニケーションをとるために掲示板や保健だより、クラスだよりを多く発行し、情報を共有する取り組みをしている。
- 保護者には、子どもの体調の変化にはすぐに対応してもらったり、家族の体調や感染状況を共有させてもらうなど、一緒に子どもたちを守るための連携が大切である。その際、保護者の就労状況や家庭の事情などにも配慮した対応を心がける。

職員も日ごろから体調を記録するなど健康管理が大切である。

- 体調不良時は出勤を控える。
- 手洗いの徹底、マスクを外す場合はソーシャルディスタンスをとる。
- 休憩は交代しながらとり、休憩室が密にならないようにする。
- 職員同士の大人数での会議などは避ける。

職員は子どもと家族を支えていくうえで大きな役割があり、自分がもし感染源になったらどうしようという思いを常に抱えている。今のコロナ禍ではどんなに気をつけていても、いつ自分の身に降りかかっても不思議はない。職員の心身の疲れや健康管理への配慮も大きなことになる。

また、子どもの発達年齢や理解力も異なるが、感染症対策の長期化に伴う子どもたちへの影響も心配されるこの頃である。

VI. 終わりに

新型コロナウイルス感染症対策に必要なワクチン接種が始まっている。医療従事者が終了していない現状があるが、感染から子どもと保育を守るために、保育施設の職員も早期にワクチンを接種できるよう対応を望みたい。

文 献

- 1) 厚生労働省. “保育所における感染症ガイドライン”
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000201596.pdf>
- 2) 日本小児感染症学会. “保育園における新型コロナウイルス感染症に関する手引き” http://www.jspid.jp/news/2003_covid19_1.pdf
- 3) 一般社団法人全国保育園保健師看護師連絡会. “保育現場のための新型コロナウイルス感染症ガイドブック第2版” <https://www.hoiku-kango.jp/wp-content/uploads/2020/10/>

(文責：渡邊 久美)